

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00375

研究課題名(和文) 全文翻訳と詳細な注釈作成による『水滸伝』の研究

研究課題名(英文) The Study on "Shuihuzhuan" through full-text translation and detailed annotation

研究代表者

小松 謙 (Komatsu, Ken)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：00195843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本課題の前提となる『水滸伝』諸版本の関係と本文変化の状況について詳細な考察を加え、あわせて『水滸伝』と密接な関わりを持つ『金瓶梅』の作者を解明した著書『水滸伝と金瓶梅の研究』を2020年に汲古書院から刊行した。

同書の成果を踏まえて、本課題の目標である『詳注全訳水滸伝』の執筆を進め、2021年8月に第一巻、2022年4月に第二巻を刊行した。同書は、主要版本間の異同をすべて指摘して異同の生じた原因を考察し、容与堂本・金聖歎本の批評を全訳し、語彙や出典、官職制度などについての詳細な注を施した上で全文を翻訳したものである。

他方で、主催する敦煌変文研究会の成果として訳注を多数共著で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『水滸伝と金瓶梅の研究』においては、これまで明確な結論が得られていなかった『水滸伝』諸本の継承関係と『金瓶梅』の作者は誰かという大きな問題について、十分な根拠を示しつつ明快な結論を出した。

同書を踏まえて刊行を開始した『詳注全訳水滸伝』は、主要版本間の異同のすべてと批評の全訳を含めた詳細な注釈を附し、原文を細部まで忠実に翻訳したもので、世界的に見てもこれまで例のない画期的なものといっても過言ではない。

『水滸伝』『金瓶梅』が中国・日本の双方において非常に強い影響力を持ち、今日も愛読者が多い点に鑑みて、これらの研究は社会的にも大きな意義を持つものと考えられる。

研究成果の概要(英文)： In 2020, I published "A Study of Shuihuzhuan and Jinpingmei," a book that details the relationship between the various editions of "Shuihuzhuan" and the changes in the text, which is the premise of this project, and also clarifies the author of "Jingpingmei," which is closely related to "Shuihuzhuan". Based on the results of this book, I proceeded with the writing of the "Complete translation of Shuihuzhuan with Detailed Notes," which was the goal of this project, and published the first volume in August 2021 and the second volume in April 2022. In these books, all the differences between the major editions were pointed out and the causes of the differences were discussed, and the critiques of the Rongyutang and Jin Shengtan editions were translated in full, with detailed notes on vocabulary, sources, and the system of official positions.

On the other hand, I have co-authored a number of translations and commentaries as a result of the Dunhuang bianwen Study Group, which I organize.

研究分野：中国文学

キーワード：水滸伝 翻訳 注釈 金聖歎 版本 批評 白話 金瓶梅

1. 研究開始当初の背景

『水滸伝』は、中国においてはいわゆる「四大奇書」の筆頭とされる最も重要な古典文学作品の一つと位置づけられ、日本においても、江戸時代以来大きな影響力を發揮してきた。日本における翻訳も、江戸時代中期に刊行された訓読スタイルによる『忠義水滸伝』以来、かなりの数にのぼる。ただ、それらの翻訳の大部分には、基本的に原文の内容を伝えることに主眼があり、『水滸伝』本文を学術的研究対象として扱い、精密な研究を加えた上で訳されたものとはいいがたいという問題点がある。これは実は日本に限った問題ではなく、中国においても、例えば杜甫の詩に対して行われるような、厳密な本文批判と、本文の意味や依拠するものを徹底して追究する態度に基づく注釈が行われたことはない。この背後にあるのは、白話文作品を伝統詩文に比して価値が低いものと見なす態度の残滓である。日中両国において『水滸伝』は、その価値を認められながらも、学術的には面白い物語という域を出ないものとして扱われてきたといっても過言ではない。

しかし『水滸伝』本文は計り知れない学術的価値を有している。白話文による表現能力を中国文学史上初めて自在に發揮し、多彩な登場人物の個性を描き分けたその文学的価値は改めて論ずるに及ばないが、更にそこで用いられている言語が、白話文が書記言語として確立していく過程を如実に示しているという点で、今日の「中国語」の成立について考える上で最も重要な資料であり、更に物語の中で描かれているさまざまな当時の社会状況、実はそれとリンクする物語の改編・刊行・受容の事情などは、中国社会について考える上で、重要な資料となる。更に、『水滸伝』が高級知識人をも読者に巻き込みつつ、印刷による大量複製に付され、不特定多数による楽しみのための読書の対象として画期的な意味を持ったという点から考えれば、その内容を徹底的に研究することは、近代的読書成立の事情を解明する上でも大きな意義を持つはずである。

2. 研究の目的

本研究は、『水滸伝』に徹底した本文批判を加えた上で、全文について詳細な注釈を加え、日本語訳を作成することを目的とする。

本研究の準備として、科研費基盤研究C「『水滸伝』本文の研究」(課題番号 16K02592)の助成を受けて、『水滸伝』第七十一回までについて、主要版本すべての本文校勘を行い、完全な校勘記を作成し、その成果として5本の論文を執筆してきた。このような校勘記の作成は『水滸伝』研究史上初めてのものであり、古来複雑極まりないものとされてきた『水滸伝』諸版本の関係も、この前例のない作業を経て初めて解明されたものといえてよい。更に、本文の変遷から浮かび上がる文学的・語学的・社会的諸事象も、これまで具体的に論じられたことのないものがほとんどを占める。

以上の準備を踏まえ、本研究においては『水滸伝』全文を、文体をも含めて可能な限り正確に日本語に置き換えるとともに、本文異同に関する注記とその理由の考察、文中に現れるさまざまな名称に関する考察、使用されている定型表現の来歴、そして物語内容が社会的・歴史的に意味するものについて詳細な注釈を付すことを目指す。

翻訳は、しばしば研究という営為に含まれないものとして軽視されがちであるが、ある文学作品を研究するためになしうる研究として、詳細な注釈を付した翻訳を作成するにまさるものはない。この点は小松が中心になって作成してきた全三巻からなる『元刊

『水滸伝』(汲古書院)で実践してきたところである。全文を日本語に置き換え、あらゆる問題点について注釈で議論を展開することは、一箇所の空白もなく対象作品を徹底的に研究することを意味する。そこで加える注釈は、単なる語釈に留まるものではなく、本文中のさまざまな事象について、文学的・語学的・歴史的・社会的な考察を加えるものであり、ここの注釈が一篇の小論文となりうるものである。このような、真の意味での注釈は、『水滸伝』に限らず、白話小説全体について見ても、日本はもとより、中国でもかつて実現されたことがない。これは、先に述べたように、白話文学を真剣な学問の対象とするという姿勢が十分ではなかったことに由来するものと思われる。本研究は、『水滸伝』を真の意味での学術的研究の対象たらしめることを一つの目的とする。

『水滸伝』にはすでに多くの翻訳が存在する。しかし、従来の翻訳のほとんどは、常体による近現代の小説と同じ文体を用いている点で大きな問題を持つ。『水滸伝』の原文は饒舌な語り口調で書かれており、ブラックユーモアに満ちたその内容は、この文体と不可分の関係にある。この点から考えれば、従来の翻訳のほとんどは文体と内容に明らかな乖離が認められるといわざるをえない。これは、読者になじみやすい文体で内容を伝えることを優先した結果であり、『水滸伝』を文学作品として正当に扱っているとは言いがたいものである。唯一、原文の文体を再現しようと試みたのは、吉川幸次郎・清水茂による岩波文庫のものであるが、日本の講談口調に近づけようとしすぎた結果、中国の小説の訳としては違和感を禁じ得ない要素を持つ。こうした意味で、原文の文体をできる限り忠実に日本語化した翻訳を作成することは、『水滸伝』を欧米の小説と同等の文学作品として扱うという意味で、重要な意味を持つはずである。

3. 研究の方法

本研究においては、『水滸伝』の本文を全訳することにより、その全体像を一般の読者にも理解しやすい形で示すことを目指した。また、注釈の中で本文異同の状況を示し、その理由について考察を加えることにより、『水滸伝』本文が成立し、変化していく過程を具体的に示すとともに、次の諸点に関する考察を進めた。

語学的側面からの検討：今日の中国語の原型となった白話文がどのようにして成立し、改良され、書記言語として自立するに至ったかを、表記・文法の両面から、実例に則して解明する。

文学的側面からの検討：教養が高くない読者でも理解可能であり、かつすぐれた表現能力を持つ言語表現がどのようにして成立し、どのようにして改善されていったかを、実例に則して解明する。

受容者とそれに対応する刊行者の側面からの検討：多くの版本に付された批評などを検討することにより、当時の読者がどのように『水滸伝』を受容したか、読者層の受容に刊行者がどのように対応し、本文の書き換えや批評の追加などを行ったかを具体的に解明する。

更に、文中に見える官職名などの名称に関する考証、文中で用いられている語が当時持っていた意味、使用されている定型表現の原拠などについても考察を加え、当時の人々が『水滸伝』をどのように受け止めていたのか、特に反体制的文学ともいべきこの作品が、当時の上流階級の人々にまで幅広く受容されていった原因などの諸点にも考察を進めた。

全文の訳と合わせて、注釈の中でその全文について以上の考察を加えることにより、

次の諸点についての考察を進めた。

中国における言文一致体成立に至る過程。

不特定多数の読者を対象として、営利目的で大量の書籍を刊行するという近代的出版が成立・発展した状況。

前項と表裏一体のものとして、不特定多数の読者が楽しみを目的として行う近代的な「読書」という行為はどのようにして生まれ、成長していったのか。その社会的背景と実態。

これらの諸点を解明することにより、『水滸伝』という東アジア全域に極めて強い影響力を及ぼした小説の性格を明らかにするとともに、大衆が読書に参入するためには不可欠の条件となる口頭言語に基づく書記言語や、近代的読書、つまり不特定多数による楽しみを目的とする読書、それに可能にする近代的出版の成立など、中国に限らず、全世界に共通する、今日のマスメディア社会を誕生させた諸要因について、具体的な事例を踏まえながら注釈の形で考察を進め、更に解説においてもその内容を敷衍した。

従来の研究は、長大な作品の一部分のみを取り上げて議論を展開するのが一般的であった。しかし、さまざまな矛盾を内包しつつ、統一体を形成している『水滸伝』のような作品の場合、一部分のみを論じるだけでは不完全な議論となることを免れることはできない。本研究が全文の翻訳と、すべての本文に対する考察としての訳注という形式を取るのはこのためである。微細な文字の異同をも見逃さない徹底した校勘を経た詳細な訳注の作成という作業を経て初めて、『水滸伝』とは何であったのかという重大な課題に対する答が、真の意味で与えられるはずであり、全体の四分の一程度の訳注が完成している現段階にあっても、上に述べた目的は相当程度に達成されつつあるものと認められる。

4. 研究成果

(1) 一年目は、まず『水滸伝』と密接な関わりを持つ『金瓶梅』の研究を推進し、中国古典小説研究会大会で発表「金瓶梅成立考」を行うとともに、論文「『金瓶梅』成立論序説」を『和漢語文研究』第17号に発表、更に前年度まで継続していた課題「水滸伝本文の研究」の成果の集大成として著書『水滸伝と金瓶梅の研究』をまとめて研究成果公開促進費に応募し採択された。同書は、長期にわたる綿密な校勘作業を踏まえて『水滸伝』諸版本の系統を初めて全面的に明らかにし、あわせてその本文の変化を通して、近代的な小説がいかにして生まれ、現代中国語がどのようにして成立したかを明らかにするとともに、『水滸伝』と深く関わる『金瓶梅』本文の内容からその成立過程を明らかにし、作者を特定したもので、画期的な内容を持つとともに、本課題を推進する上で不可欠の内容であり、同書の完成は前課題の成果であるのみならず、本課題の重要な一部とも見なすべきものである。更に、本課題の目的である詳細な注釈を加えた『水滸伝』の全文翻訳にも着手し、第七回まで作業を完了した。これも書籍化し、前述の書籍とあわせて刊行すべく準備を進めた。この注釈は、主要版本6種の全文にわたる完全な校勘記と、容与堂本・金聖歎本に附された批評の全訳を含んで、文中に現れる語句や制度・出典などに関わる詳細な考証、更には異同が生じた原因や金聖歎の文学思想などに関わる精密な分析を含み、これまで内外で行われてきた『水滸伝』研究にはない全く新しい研究と呼ぶべきものである。このほか、白話文学に関わる課題として、主催している敦煌変文研究会の成果をまとめ、「大目乾連冥間救母變文訳注(三)(四)」を『京都

府立大学学術報告 人文』第 71 号と『和漢語文研究』第 17 号に発表した。

(2) 二年目には、本課題の主たる目標である詳細な注釈と完全な校勘記を伴う『水滸伝』の全訳を推進するとともに、『水滸伝』及び同書と深い関連を持つ『金瓶梅』に関わる研究を進めた。2018 年度まで助成を受けていた課題「『水滸伝』本文の研究」の成果をまとめるとともに、今回課題の成果をも加味した著書『水滸伝と金瓶梅の研究』を、日本学術振興会研究成果公開促進費の交付を受けて、汲古書院から 11 月に刊行した。同書は従来明確な結論を得るには至っていなかった『水滸伝』諸本の関係について、全文の完全な校勘に基づいてその継承関係を明らかにし、更にその結果を踏まえて、『水滸伝』の本文がなぜ、どのように変化していったかを、文学・語学などの多様な面から明らかにするとともに、やはり長期にわたって論争の的となってきた『金瓶梅』の創作動機とその作者について、本文の内容に依拠して明快な結論を示したものである。同書の内容は、そのまま現在進行中の『水滸伝』訳注に直結するものである。同書をまとめるのに並行して訳注作業も推進し、夏には第一巻分の訳稿をまとめ、『詳注全訳水滸伝』として汲古書院より刊行の予定であったが、コロナウィルス等の影響により出版作業が遅れ、2020 年度中に刊行することはできなかった。同時に第二巻分の訳注をも完成させた。また、東京大学 U- PARL 公開シンポジウム「漢籍デジタル化公開と中国古典小説の展開」において本課題に関わる講演「『水滸伝』版本研究から何が分かるか—白話文学における校勘の意義」を行った。更に、白話文学に関わる課題として、主催している敦煌変文研究会の成果をまとめ、井口千雪ほかとの共著で「大目乾連冥間救母變文訳注(五)」を『京都府立大学学術報告 人文』第 72 号に、「金剛醜女因縁」訳注(一)」を『和漢語文研究』第 18 号に発表した。

(3) 三年目には、本研究課題の最も主たる目的である『水滸伝』の訳注として、8 月に『詳注全訳水滸伝』第一巻を汲古書院から刊行した。同書は『水滸伝』の第六回までについて本文を全訳し、更に詳細な注を附したものである。注においては、主要 6 種のテキスト間に見られる異同を原則として全部指摘し、そのすべてについて異同が生じた原因を考察するとともに、容與堂本・金聖歎本に見られる批評を全訳し、更に文中に見える難解な語や官職制度に詳細な注を加え、また踏まえる典故なども可能な限り指摘した上で、物語の成立過程などについても詳しく考察を加えたもので、日本はもとより、中国を含めた国外においてもこれまで例のない水準の注釈とあってよい。更に第七回から第十三回までを収める第二巻、第十四回から第二十回までを収める第三巻の訳注をも 2022 年度中に完成させ、同年度中の刊行を目指していたが、コロナウィルス流行の影響で、出版社の事業に遅れが生じたため、年度中の刊行はできなかった。第二巻は 2022 年 4 月に刊行され、第三巻も刊行準備中である。これらは、本研究期間を通じて行ってきた研究の成果であり、当初予定していた計画を上回るペースで進行しているものである。また、東京大学附属図書館 U- PARL 協働型アジア研究企画「東京大学所蔵水滸伝諸版本に関する研究」にも参加し、同企画の研究会に参加した。その成果は近日中に刊行される予定である。以上のように、申請時に計画していた事業を着実に進めているほか、関連する研究として、本研究課題の重大な要素である中国白話文の成立過程探求の上で重要な意味を持つ敦煌変文の研究を進め、主催する敦煌変文研究会の成果として、井口千雪ほかとの共著で「金剛醜女因縁訳注(二)(三)」を、『京都府立大学学術報告 人文』第 72 号と『和漢語文研究』第 17 号に発表し、同作品の訳注を完成させた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小松 謙, 井口 千雪, 大賀 晶子, 川上 萌実, 孫 琳浄, 玉置 奈保子, 田村 彩子, 藤田 優子, 宮本 陽佳	4. 巻 73
2. 論文標題 「大目乾連冥間救母變文」訳注(5)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告. 人文	6. 最初と最後の頁 67 - 112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 井口千雪,大賀 晶子, 川上 萌実, 小松 謙,孫 琳浄, 玉置 奈保子, 田村 彩子, 藤田 優子, 宮本 陽佳	4. 巻 1818
2. 論文標題 「金剛醜女因縁」訳注(一)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和漢語文研究	6. 最初と最後の頁 115 - 164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小松謙	4. 巻 17
2. 論文標題 『金瓶梅』成立論序説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和漢語文研究	6. 最初と最後の頁 182-199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小松 謙,井口 千雪,大賀 晶子,香月 玲子,川上 萌実,孫 琳浄,玉置 奈保子,田村 彩子,藤田 優子,宮本 陽佳	4. 巻 71
2. 論文標題 「大目乾連冥間救母變文」訳注(三)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告 人文	6. 最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井口千雪・大賀晶子・香月玲子・川上萌実・小松謙・孫琳浄・玉置奈保子・田村彩子・藤田優子・宮本陽佳	4. 巻 17
2. 論文標題 「大目乾連冥間救母變文」訳注（四）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和漢語文研究	6. 最初と最後の頁 200-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井口千雪・大賀晶子・川上萌実・小松謙・孫琳浄・玉置奈保子・田村彩子・藤田優子・宮本陽佳	4. 巻 73
2. 論文標題 「金剛醜女因縁」訳注（二）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告. 人文	6. 最初と最後の頁 41-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井口千雪,大賀 晶子, 川上 萌実, 小松 謙,孫 琳浄, 玉置 奈保子, 田村 彩子, 藤田 優子, 宮本 陽佳	4. 巻 19
2. 論文標題 「金剛醜女因縁」訳注（三）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 和漢語文研究	6. 最初と最後の頁 196-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小松謙
2. 発表標題 『水滸伝』版本研究から何が分かるか 白話文学における校勘の意義
3. 学会等名 東京大学U- PARL公開シンポジウム「漢籍デジタル化公開と中国古典小説の展開」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小松 謙
2. 発表標題 『金瓶梅』成立考
3. 学会等名 中国古典小説研究会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小松 謙	4. 発行年 2020年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 396
3. 書名 水滸傳と金瓶梅の研究	

1. 著者名 小松 謙	4. 発行年 2021年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 320
3. 書名 詳注全訳水滸伝 第一巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------